

★シカゴ通信①夥しい犠牲の末に＝有吉須美人（ブルース・ピアニスト）

昼下がりの公園は、近所の子供連れや散歩する年配の人たちで賑わっている。そのほとんどがマスクを着用していないのは、コロナワクチンの二度の接種が終わったか、もとより感染を気に留めていないからで、当然ながらその見分けは付かない。先の大統領選が激しくなるにつれて顕在化した「アメリカの分断」がクローズアップされる中、個人の政治姿勢の象徴の一つだったマスクだが、接種を完了すれば「マスク不要」の指針を CDC が最近発表したこともあり、ワクチンの普及や感染鈍化と共にその意味合いも変わってきたようだ。しかし、既に抗体を獲得していてもトランプ信者と見られるのが嫌だからマスクを着けるといふ人もまだいるが、他人に対して安心感を与えることを理由にする人はあまり見かけない。人目を気にせず、自分のやりたいようにやる個人主義の国らしい。



現在ブリッジ・フェーズ(制限措置のある PHASE 4 から、制限が全て解除される PHASE 5 までの橋渡し期間)のイリノイ州は、今後、新型コロナに関する

州全体の指標が大幅に悪化しない限り、[6月11日](#)に最終段階の第5フェーズに移行する。今はまだスーパーやレストラン、公共施設などの屋内へ入るにはマスク着用を求められるが、街は既にコロナ危機を脱出したような緩んだ気分にも包まれ始めていた。

それでも先日のシカゴ・サンタイムズ（web版）は「シカゴ市住民の約48%が少なくとも一回はワクチン接種を受けているが、二回目を完全に済ませているのはまだ38%で、コロナ感染率の高い地域の接種率はもっと低い…ワクチンが充分供給されているにもかかわらず、接種予約の数は日に日に下がっている」と伝えて、マスク着用とワクチン接種を奨励していた。陰謀論やマッチョ思想だけでなく、体内へ異物を容れたくないアンチワクチン主義やめんどくさがり屋など、絶対数のワクチン拒否層が存在する上、一回目の接種予約で自動的に二回目の予約が決められるため、アメリカ的楽観主義（単にいい加減なだけ）により二回目に来ない人の増加も問題になっているからだ。

優先順に接種の始まった12〜2月頃は、ようやく予約できても会場で長時間待たされ、特に車に乗ったままの接種方法だと[3時間](#)ほど掛かったらしいが、対象が18歳以上で資格も無条件になり、私たちが予約を始められた4月には、ネットで自由に時間が選べて待ち時間も15分以内になっていた。そして今は対象も12歳以上に拡大されている。

今年1月、親しかった同い年のパパ友をコロナで失った。感染者数3320万、死亡者数59.2万（ニューヨーク・タイムズ）という夥しい犠牲の末に、毎日の新感染確認はようやく2万人台にまで下がってきたが、ワクチン接種が間に合わずに亡くなったボスニア人の彼とその家族を思うと無念でならない。

有吉須美人 近代音楽のルーツと呼ばれるブルースの本場、シカゴを拠点にあ活動するピアニスト。2017年にはアジア人として初めて「シカゴ・ブルースの殿堂」入りを果たした。

（つづく）